
Betrothed Party ! ~ 婚約者は突然に

静岡運転所

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B e t r o t h e d P a r t y ! 〱 婚約者は突然に

【Nコード】

N 6 0 5 8 V

【作者名】

静岡運転所

【あらすじ】

誕生日を迎え、晴れて16歳となった俺こと矢代田康一。そんな俺に両親からプレゼントが——って、そのプレゼントが女の子ってどういうこと？ えっ、なになに、お前の婚約者だから一緒に暮らせ？ そんなの初耳なんだけど！？ おまけに、やってきた女の子は俺との婚約が不本意らしく、冷ややかな態度をとり続けていて…果たして、こんな調子で両親の言う『婚約者との大団円（B e t r o t h e d P a r t y）』は作り上げられるのか？

「現在作者の都合により更新を停止しています」

序章 婚約者は突然に 〈Betrothed Appearing

序章 婚約者は突然に 〈Betrothed Appearing
ng

軒先は、白と茶色の斑模様またらになっていた。

「……………」

玄関の異様な光景に、俺は一言も声を出せなかった。

落ちつけ。落ちつくんだ、俺。少なくとも、俺はこんなものを軒先にばら撒いた覚えはない。第一、今朝家を出た時にこんなものはなかった。それだけは確信を持って言える。

じゃあこの光景は何だ？ いや待て。そもそもここに落ちているのは一体何なんだ？ 白いのはさておくとしても、問題は茶色のほうだ。茶色のものなんてそうそうあるものじゃない。俺の思いつく限り——駄目だ。ここを便所にしていた奴がいただなんて思いたくもない。ま、見るからに違うわけだが。もしアレだったら確実に匂いで分かるしな。なんなんだろう、これ。

……まあ、いいや。後で掃除をしておけばいいか。

箒とちりとりを用意を心に留めながら、足を郵便ポストに向けた。一人暮らしをするようになって早三年。家に帰ってから郵便ポストを覗くのも、もはや習慣となっている。

どうせ今日も空だろう。俺宛の郵便物なんて年に数回あるかないかだ。といいながら、入っているのを期待している俺がいるのが恨めしい。ないと分かっているながらも、俺はいつものように郵便ポストのふたを開け——

「……………」

あった。

入っていたのは海外からの手紙だった。ニュージーランドからの
Eメール。差出人は見なくても分かる。間違いなく俺の親だ。

「しかしなんでまた……」

嘆息つきつつ、俺は手紙の封を切った。この親が俺にメールをよ
こすのは、俺の誕生日の時か、向こうで何か起きた時の二択しかな
い。

中から便箋^{びんせん}を取り出す。父さんのものと思われる字は、お世辞に
も達筆とはいえない。毎年つつこむのもなんだが、罫線^{けいせん}を守る気は
さらさらなようだ。

『康一^{こういち}、誕生日おめでとう』

手紙はそんな一文から始まっていた。そっか、俺の誕生日か。も
う一週間も前に過ぎ去ったけどな。今年は俺のことを忘れてたのか
と思っただじゃないか。

そこから先は、息子を心配する語句がずらりと並んでいた。一人
息子ということもあり、うちの親は過保護気味だ。せめて息子の誕
生日ぐらいは覚えてほしかったけど。

毎年恒例の手紙を読み飛ばしていた俺だったが、あと三行という
ところで目がとまる。

『それで、今年のプレゼントなんだけど、康一も16歳になること
だし、とびきりのサプライズを用意しました。』

一人日本に残る息子を慮ってか、俺には毎年何か一つプレゼント
が贈られてくる。去年は洗濯機が送られてきた。ていうか、毎年サ
プライズなのは気のせいですね。多分。

『この手紙と同じぐらいに届くと思います。取り扱いには気をつけ
て。』

そして妙に軽い挨拶で手紙が終わっていた。

もう一度玄関を見回す。いつもならこの辺りに——今、茶色の斑
に染まっている辺りに——どでかい箱が置かれているのだが、それ
らしい箱は見当たらない。誕生日から一週間が過ぎているが箱らし
きものは見ていない。まさかあの親、実は送り忘れてたとかいうん

じゃないだろうな？　ありえそうで困る。

プレゼントのことはさておくとしても、この玄関の惨状はどうしようか。そう思っていると、足元からカサツと乾いた音がした。

「ん？」

よく見ると、俺が踏んづけていたのはダンボールの切れ端だった。裏には白い紙が張り付いていた。プレゼントをくるむのに使う、滑らかな包装紙だ。

改めて軒先を眺めてみる。奇怪な眺めだったが、茶色の正体がダンボールで、白の正体が包装紙だと分かったことではない。ただごみが散らかってるだけじゃねえか。

そして、さらに言えば、白い紙の正体は、いつも俺へのプレゼントの箱に巻かれている、あの包装紙だった。生まれてからこの浪戸なみと市に住み続けている俺だが、親からのプレゼント以外でこの紙を見たことはない。十中八九、プレゼントを包んでいたものだろう。

「ってことは、これが今年のプレゼント……？」

箱の残骸なのはいいとしても、肝心なプレゼントはどこにあるんだ？　包装紙とダンボールが散らかった軒先。それは、逆に言えば他に何も無いということでもある。まさか中身が爆弾だったとか？

うちに着いてからタイマーで爆発。何の嫌がらせだ。

「……わからん」

考えても埒うちが明かない。まずは家に入ろう。話はそれからだ。ドアノッカーに手をかけると、ドアは何の抵抗もなく開いた。

「……あれ？」

奇妙なことは良く続く。おかしい。今朝戸締りをしたはずなのに、一瞬戸惑ったが、軒先の方が気になって気になって、気にも留めていた余裕はなかった。かけ忘れぐらいすることも誰にでもあるさ。「ただいまー」

挨拶に答える声はない。一人暮らしなんだからあつたら困るけど。そいつは不審者確定だな。

とりあえず、まずは自分の部屋に鞆を置いて、それから玄関前を

掃除して——これからの行動を脳内シミュレートしていた俺は、ふと聞こえた水音に足を止める。

「ん……？」

水道管から水が漏れるようなチヨロチヨロ……という水漏れの音ではない。シャワーを全開にしたときの、シャアアア……という激しい水音だった。

おいおい、何をしたんだ今朝の俺。玄関を開けっ放しにただけでは飽き足らず、水道の栓まで開けっ放しにしたまま学校へ行ったのかよ。玄関が開けっ放しなのは勝手に入られるだけですむ。だが、シャワーの出っぱなしは余分に水道料金を取られてしまう。いくら光熱費は親持ちとはいえ、出っぱなしにする道理もない。

リビングに荷物を放り出した俺は即座に風呂場に踵^{かか}を返した。

「まったく、何やってるんだよ今朝の俺は……！」

悪態をつきながら床を踏みつけるようにして風呂場に向かう。実は俺が二人いて、今朝の俺と今の俺は——って、それってただの別人じゃん。

「玄関はともかくシャワーぐらいはしっかり栓を……」

すりガラスでできた風呂場のドアを力任せに開け放ち——固まった。

正面に、なにかがあった。

人の形をした、肌色の物体が。

正しくはあったではなく、いた。

物体じゃなく、人が、そこにいた。

より正確には、女の子がそこにいた。

裸の、女の子が。

霧に満ちた無音の空間に、シャワーの水音だけが無常^{むじやう}に響き渡る。俺は本日二度目の驚愕を味わうことになった。

これが家に帰って何事もなく遭遇した出来事なら、俺は即刻回れ右をしていたことだろう。だが、既に驚愕の味を知ってしまった俺は、その場に縫いつけられたように動けなかった。手の伸ばせる距

離にいる女の子から目が離せない。

俺の目線の少し下に彼女の顔があった。至近距離にいるから、大きく見開かれたつぶらな瞳から、すっと通った鼻筋、さらには半開きになった薄い唇まで、部分の一部分が見てとれる。茶色がかつたショートヘアは濡れた中でもふんわりとした髪型を保っている。早くも玄関のことを忘れてしまいそうな可愛さだ。

靄^{もや}がかかる中に、彼女の白い肢体が浮かぶ。滑らかな白磁のような肌には傷一つない。やや幼めな顔とは対照的に、誰もが羨む^{やいちゃ}プロポーションの持ち主だった。特に、俺が女の子と判別する根拠となつた、濃密な霧に霞むあの二つの膨らみは――

「……………え？」

止まっていた時間が、彼女の一声で再び動き出す。ここまでが約一秒。ただ見えた景色を写真のように脳内で切り取っていただけで、疚^{やま}しいことは思う間がなかったことを白状しておこう。裸の女の子をじろじろ眺める程、俺は変態じゃない。

「……………」

「……………」

目が合った。そして、

「きゃあああああああああああああ！」

――渾身の一撃。
クリティカルヒット

彼女がやけくそ気味に放った正拳突きは、見事に俺の鳩尾^{みぞおち}を捉えている。

悲鳴と共に、俺の体は風呂場から吹き飛ばされた。

これが彼女との――天ヶ原鈴華^{あまがはるか}との初めての出会いだった。

序章 婚約者は突然に 〈Betrothed Appearing〉(後書き)

許婚、始めました。

鉄分はないのでご安心ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6058v/>

Betrothed Party！ ～ 婚約者は突然に

2011年9月15日03時31分発行